

草津駅周辺エリア

未来

ビジョン



目次

1. はじめに	・・・1
くさつのこれまでと現在地	・・・2
— まちの過去と現在をふりかえる	
2. まちの物語をたずねる	・・・3
・まちの変遷	・・・3
・中心市街地活性化の取組をふりかえる	・・・4
3. わたしたちの現在地	・・・6
・まちの概況と課題	・・・6
4. まちなかの魅力資源	・・・11
・COLUMN	
「ウォーカブルなまちづくりがめざすもの」	・・・13
「シビックプライド醸成への期待」	・・・13

くさつのこれからを導く旗じるし	・・・14
— まちの未来を描き、めざす未来像を掲げる	
5. みんなの未来ビジョンを考える	・・・15
・「草津駅周辺エリア未来ビジョン」の位置づけ	・・・15
・対象エリアの設定	・・・16
6. みんなで考え描くまちの未来	・・・17
・中心市街地活性化協議会によるワークショップ	・・・17
・KUSATSUまちなかクロッキー会議	・・・18
・くさつDREAM MAP	・・・22
7. とともに掲げる旗じるし	・・・23
・めざす将来像	・・・23
・5つのエリアとめざすコンセプト	・・・24

くさつのこれからを仲間とともにつくる	・・・35
— めざす将来像を仲間とともに実現する	
8. 未来への歩みをすすめる	・・・36
・社会実験でチャレンジする	・・・36
・滞在快適性等向上区域の設定	・・・40
・ロードマップ／指標	・・・41
・未来ビジョンの推進体制	・・・42
・デザイン会議の使いこなし方	・・・43
・COLUMN	
「公共空間の豊かさがわたしたちの幸せにつながる」	・・・44

1. はじめに

山々からの恵み豊かな水脈が流れ込むびわ湖をゆるやかに囲む滋賀。

その南東部に位置する草津市は、かつて、東海道と中山道が分岐合流する宿場町として栄え、街道に育まれた多様な文化と風土をいまに伝えています。

また、交通の要衝であった系譜をたどり、国道や鉄道、高速道路など国土移動の主要な広域交通が今も集積し、近畿圏と中部圏とをつなぎ、交通の要衝としての立地を活かして、確かな発展を続けてきました。

草津駅周辺エリアは、草津市の“これまで”と“現在”が入り混じる、暮らしを支える中心市街地です。このおよそ10年間、行政と民間が手を取りあう官民連携によって、老朽化する公共施設の集約やあらたな空間づくりなど基盤づくり、活動する人を支える環境づくりによって、だれもが多様に使いこなすための舞台づくりを力強くすすめてきました。

一方で、社会は大きな転換期を迎えており、人口減少や超高齢化などに起因するさまざまな課題は、これからわたしたちのまちにも等しく訪れることが予想されます。第6次草津市総合計画基本構想人口の見通しによると、草津市の人口は、5年後の2030年（令和12年）をピークに、その後、ゆるやかに減少していくと予測されており、いままで発展することが当たり前だったまちに、そう遠くない未来、大きな転換期が訪れようとしています。

これから、まちが直面する問題や危機、すでに抱えている課題は、だれかが解決するのではなく自分たちで立ち向かうもの。先人たちから受け継いだまちのポテンシャルを見出すことからはじめ、ひとりひとりが得意を持ち寄り、知恵と工夫で共に考え共創※1することで、まずはやってみようと挑戦することがたのしいと思えるまちを実現するため、草津駅周辺エリア未来ビジョン（以下「未来ビジョン」という。）を策定しました。

未来ビジョンを共有し、やり方は何度でも見直し、より良い選択肢が見つければ、軽やかに次へと歩みをすすめてみましょう。ひとりひとりが主人公として、これからも健やかな草津のまち暮らしが続くことを、未来ビジョンに託し、ともにまちづくりをたのしみましょう。



くさつの これまでと 現在地

まちの過去と現在をふりかえる

2. まちの物語をたずねる

■まちの変遷

ひと中心のまちが “出会い”から“共創”へ

まちの変遷をたどると、このまちはいつの時代も“ひとがあつまり出会う”まちでした。

「出会い」は、草津のまちのあらゆる場面で見られ、長らく親しまれてきた言葉です。このまちが受け継いできた大切な個性であり、形のない資源だと考えています。

近年、鉄道や車といった移動手段の発展により、ひとの移動が大きく広がることで、まちも広がり、それは均衡ある発展をもたらすとともに、都市機能の分散化もすすみました。

時を超えたいま、人口減少をむかえ、再びコンパクトなまちづくりへの回帰が始まっています。草津のまちがもつ、交通の要衝としての系譜をたどり、ひと中心のまちへの回帰。「出会い」という地域資源を活かし、次は「共創」するまちへ、出会いから始まる繋がりが、“共創”を生み出す。力を合わせて未来を切り拓く、ひと中心のまちづくりが始まっています。

江戸

全国から歩いて旅する宿場町“ひと中心の出会いのまち”

東海道と中山道が分岐合流する交通の要衝だった草津のまち。全国津々浦々より訪ねる旅人たちが持ち寄る、その土地の産物や文化、形あるものからそうでないものまでが、ここに集い、“出会い”を育む、ひと中心のまちの姿がありました。

Keyword：街道文化、出会いのまち、ひと中心のまち



東海道五拾三次之内 草津 名物立場
(歌川広重) ※1

明治・大正

鉄道の開通、東海道本線と草津線が合流

明治22年に鉄道駅である草津駅が開業。交通の要衝の歴史を継承し、東海道本線と草津線の分岐駅として、人の移動の広域化を支え、駅を中心とした市街地形成がすすみました。

Keyword：移動の広域化、駅中心のまちづくり



1954(昭和29)年当時の草津駅舎

昭和・平成前期

車社会の到来、国土の広域交通網が集積

戦後、車社会の到来。国道1号や名神高速・新名神高速などが集積する国土交通の要衝として、産業の集積がすすむ一方、生活圏の広域化を受け、都市機能の分散化がすすみました。

Keyword：生活圏の広域化、都市機能の分散化



2005(平成17)年完成した
草津田上インターチェンジ

平成後期・令和

コンパクトで歩いて暮らせるまちづくり“ひと中心の共創のまち”へ

人口減少に備え、草津駅を中心とした“コンパクトで歩いて暮らせるまち”をめざして、中心市街地活性化を推進。同時に健幸都市の実現に向け、令和元年度に“ひと中心のまちづくり”を掲げウォーカブル推進都市になりました。

Keyword：人口減少、コンパクトなまちづくり、ウォーカブル
ひと中心のまち



草津駅前広場での社会実験の様子

■中心市街地活性化の取組をふりかえる

未来ビジョンが示す草津駅周辺エリアは、平成25年11月に国の認定を受けて策定された「草津市中心市街地活性化基本計画」に基づき、老朽化する公共施設や新たな空間づくりなどのハード事業と、活動する人を支えるソフト事業を、官民連携によって取り組んできました。

基本計画に定めた目標指標はおおむね達成することができ、結果として都市のもつポテンシャルを最大限に発揮したまちづくりを実現することができました。



市民の暮らしを守り育む公共施設の整備



低未利用地の緑化整備とテナントミックス



地域資源を活かした改修とエリアリノベーション



活動を支え育てる環境づくり

第1期（平成25年度～平成30年度）

“元気”と“うるおい”のある生活交流都市の創造

平成24年10月	草津川跡地利用基本計画策定
平成25年2月	草津まちづくり株式会社設立
平成25年11月	草津市中心市街地活性化基本計画（第1期）認定
平成25年12月	草津まちづくり株式会社を都市再生推進法人に指定（全国11番目）
平成26年7月	niwa+（ニワタス）供用開始 5店舗オープン
平成26年12月	第1回みんなdeつなご 草津まちイルミ実施
平成29年4月	草津川跡地公園de愛ひろば供用開始 ココリパ3店舗オープン
平成29年12月	第1回草津小市開催
平成31年3月	草津市中心市街地活性化基本計画（第2期）認定

■目標指標に対する達成状況	目標値（H30）	実績値（H30）	
①歩行者通行量（平日）	11,709人/日	12,967人/日	⇒ 達成
②空き店舗率	9.5%	9.3%	⇒ 達成
③福祉・文化・交流施設の利用者数	538,512人/年	345,017人/年	⇒未達成

■第1期のふりかえり

- 草津まちづくり株式会社や行政が中心となって、niwa+等のにぎわい拠点を整備され、「歩行者通行量」や「空き店舗率」の改善しましたが、エリア別に見ると、依然として本陣周辺エリアは衰退傾向にあります。
- 指標の一つである「福祉・文化・交流施設の利用者数」は、「くさつシティアリーナ」や「（仮称）市民総合交流センター」が未整備であり、目標達成には至りませんでした。
- 草津まちづくり株式会社、草津商工会議所と行政が連携し、官民が一体となって取り組む舞台ができました。

第2期（令和元年度～令和6年度）

ひとが行き交いひとが集い にぎわいと交流広がる健幸なまち

令和元年6月	くさつシティアリーナ（YMITアリーナ）供用開始
令和元年8月	ウォーカブル推進都市に登録
令和2年2月	北中西・栄町地区第1種再開発事業（クロスアベニュー）竣工
令和3年5月	市民総合交流センター（キラリエ草津）供用開始
令和5年	草津市中心市街地活性化協議会プロジェクト10年
令和6年8月	草津市立プール（インフロニア草津アクアティクスセンター）供用開始
令和7年3月	草津市中心市街地活性化基本計画（第2期）期間満了

■目標指標に対する達成状況	目標値（R6）	実績値（R5）
①歩行者通行量（休日）	11,282人/日	10,641人/日
②営業店舗数	735店舗	727店舗
③健幸・観光・交流施設の利用者数	592,427人/年	586,975人/年

■第2期のふりかえり

- 新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限された時期がありましたが、施設整備や公共空間の活用が進み、人の流れが生まれたことで、「歩行者通行量（休日）」「健幸・観光・交流施設の利用者数」は増加しています。また、まちなかの居住人口や人の流れの増加に伴う、多様なニーズに応えるよう、魅力的な店舗の出店が進み、「営業店舗数」も増加しており、令和5年度時点で目標値は概ね達成できています。
- 草津市中心市街地活性化協議会と草津まちづくり株式会社が中心となった事業が多数展開され、官民連携の取組が日常となってきています。

中心市街地活性化の取組の総括（参照：P17：草津市中心市街地活性化協議会によるワークショップの主な意見）

草津駅周辺に残された大規模な低未利用地を活用し、老朽化した公共施設の集約化と、公園などのうるおいある公共空間の整備を、官民が連携して行うことにより、駅周辺の都市機能の更新を進め、都市の魅力を高めることができました。

次の段階としては、草津市中心市街地活性化協議会からの右記の意見を踏まえ、更なるまちなかの活性化に取り組みつつ、中心市街地を市民の生活の拠点として、より多くの市民に実感していただくために、関連計画と連携し、湖辺や周辺地域とのつながりをしっかりと構築していくことが重要です。

（参照：P17）

- 草津川跡地公園周辺がにぎやかに。駅前のにぎわいをもう一度。
- まちを歩く人が増えた。同時に車も増えた歩行者空間の安全が心配。
- まちの公共空間がもっと使いやすくなるといい。
- 通りを歩く人は増えた。風情ある建物がなくなり宿場町の景観が失われている。
- スポーツ施設とまちの暮らしの共存を考えたい。 など

3. わたしたちの現在地

■まちの概況と課題：人口

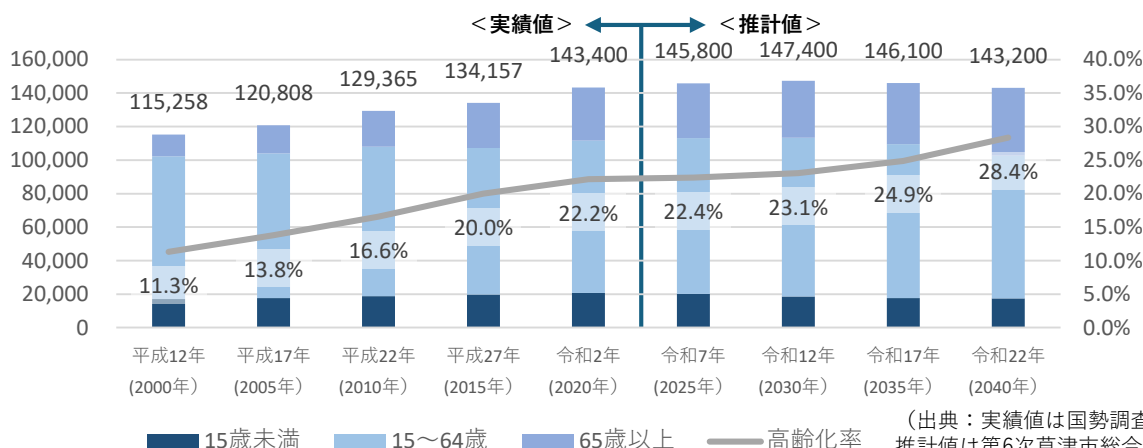
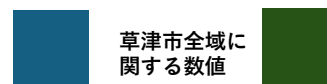
人口 高齢化率 の推移

市全体の人口は増加傾向にあるものの将来、減少傾向へ転じる見込み

市全体の人口は、平成27年に約13.7万人で、その後も緩やかに増加し、令和2年には、約14.4万人となっています。今後の人口推計では、令和12年がピークとなり、その後減少し、令和22年には約14.3万人程度になる見込みとなっています。

また、高齢化率は、高齢者人口の増加に伴い上昇し、令和2年には22.1%となり、令和22年には28.4%になる見込みとなっています。

<調査範囲>

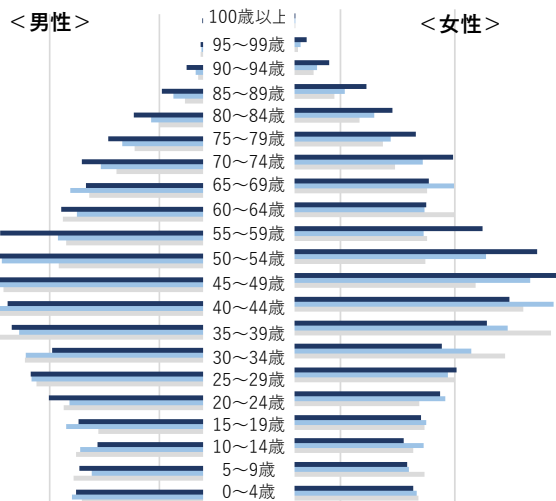


(出典：実績値は国勢調査推計値は第6次草津市総合計画を基に作成)

人口構成

45歳から59歳の層が多く、高齢化のピークが近づいている。

中心市街地における年齢別人口ピラミッドを見ると、平成22年時点で多かった35歳～49歳代が、10年経過後も、そのままボリュームゾーンとして45歳～59歳代が多くなっており、まもなく高齢化のピークを迎えることになります。

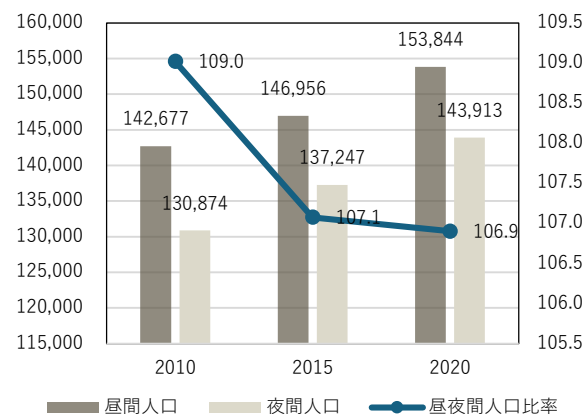


■ R2 ■ H27 ■ H22 (出典：国勢調査)

昼夜人口と比率

昼間人口、夜間人口ともに増加している

昼間の人口が夜間の人口を上回る状態が続いています。昼間の人口も夜間の人口も年々増加していますが、昼夜間の人口比率は減少傾向にあり、夜間人口の伸び率が大きくなっています。



(出典：国勢調査)

■まちの概況と課題：産業

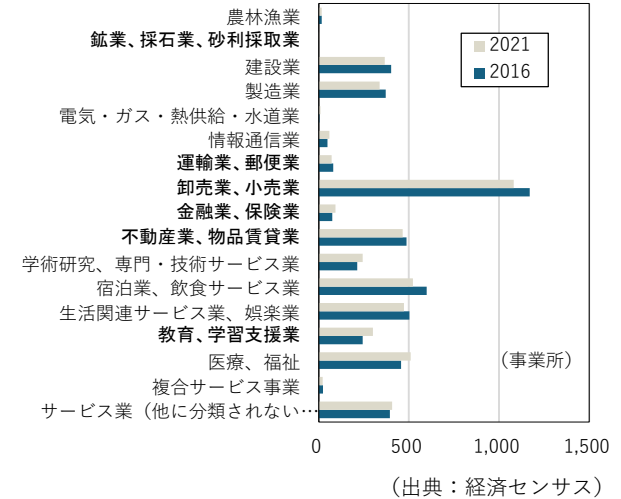
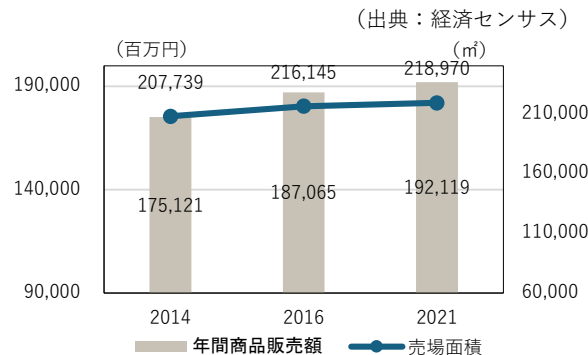
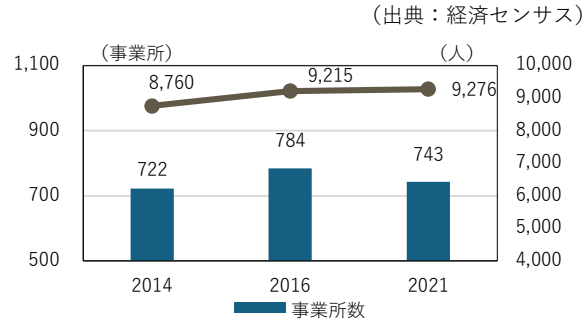
事業所数 販売額等

小売業の事業所数は減少しているが、
従業員数、年間商品販売額、売場面積は増加している

市全体における小売業をみると、平成28年（2016年）から令和3年（2021年）の間で、事業所数は減少していますが、従業員数、年間商品販売額、売場面積は増加しています。

市全体の産業は、事業所数は平成28年（2016年）から令和3年（2021年）の間で減少しています。

一方、業種別に見ると、学術研究、専門・技術サービス業、教育・学習支援業、医療・福祉業などは増加しています。

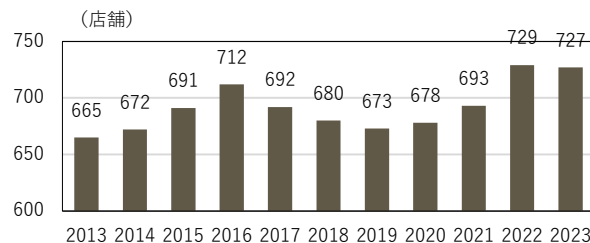


営業店舗 空き店舗

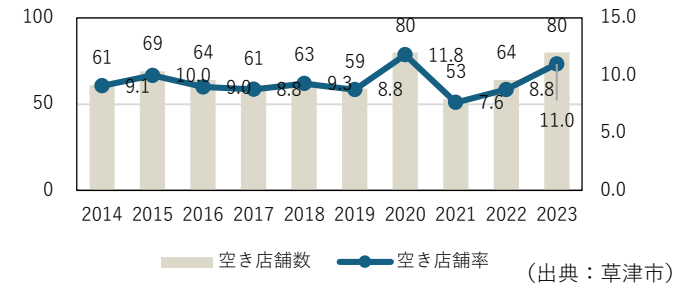
中心市街地における営業店舗数は増加しているが、
空き店舗数も増加している

中心市街地における営業店舗は、2019年に673店舗まで減少していますが、2023年には727店舗へと増加しています。

空き店舗は、70店舗前後で推移していましたが、2020年には80店舗（空き店舗率11.8%）と急増しています。その後、一時的に減少しましたが、2023年には再び、空き店舗率11.0%となっています。



(出典：草津市)



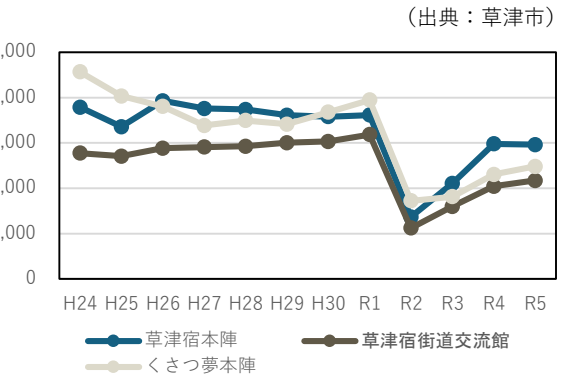
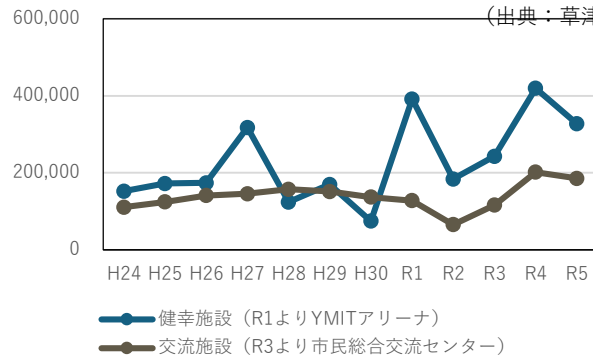
■まちの概況と課題：コミュニティ

公共施設 利用者数

新たに整備された施設の利用者は増加したものの、
既存施設、特に歴史・文化施設の利用者が減少

中心市街地における公共施設利用者数は、令和元年度に整備された「YMITアリーナ」や、令和3年度に整備された「キラリエ草津」、令和6年度に供用した「インフロニア草津アクアティクスセンター」など、新たに整備されたスポーツ施設を中心に、まちなかの利用者数は増加しており、市民生活の舞台としての中心市街地の利用が進んでいます。

一方で、草津宿本陣、草津宿街道交流館、くさつ夢本陣など、旧街道の歴史にちなんだ既存の公共施設利用者数は減少傾向にあり、旧街道の歴史的魅力の喪失に繋がっています。

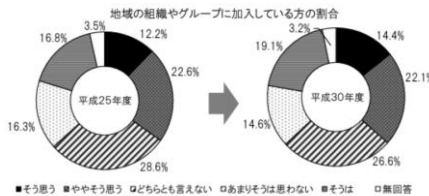
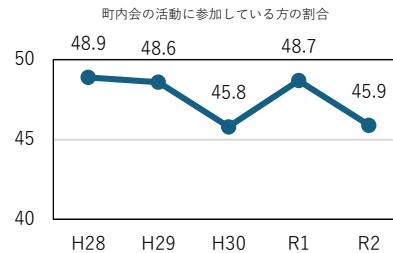


町内会 加入率

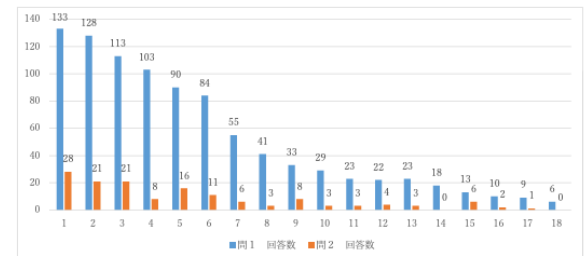
地域コミュニティの希薄化
担い手不足

市全体の町内会の加入率は減少傾向にあり、地域の組織やグループに属している方の割合も、「そう思う」、「ややそう思う」の割合が平成25年度から平成30年度で増加している一方で、「そうは思わない」、「あまりそうは思わない」の割合も増加しています。

町内会活動に関する課題としては「役員のなり手がいない」、「役員の負担が大きい」、「会員の高齢化」などが挙げられています。



	問1 回答数	構成率	参考比率	問2 回答数	構成率	参考比率
1. 役員のなり手が少ない	133	14%	70%	28	19%	15%
2. 役員の負担が大きい	128	14%	67%	21	15%	11%
3. 会員の高齢化	113	12%	59%	21	15%	11%
4. 行政からの依頼事項が多い	103	11%	54%	8	6%	4%
5. 行事、活動等の参加者が少ない	90	10%	47%	16	11%	8%
6. 住民の関心が低い	84	9%	44%	11	8%	6%
7. 活動のマンネリ化	55	6%	29%	6	4%	3%
8. ゴミの集積所、防犯灯の維持管理	41	4%	22%	3	2%	2%
9. 町内会の未加入世帯が増加している	33	4%	17%	8	6%	4%
10. 町内会内の意見調整が難しい	29	3%	15%	3	2%	2%
11. 新旧住民の交流	23	2%	12%	3	2%	2%
12. 町内会の集会所がない	22	2%	12%	4	3%	2%
13. 予算が少ない	23	2%	12%	3	2%	2%
14. 集会所の維持管理	18	2%	9%	0	0%	0%
15. その他	13	1%	7%	6	4%	3%
16. 必要な情報が得られない	10	1%	5%	2	1%	1%
17. 行事等の会場の確保	9	1%	5%	1	1%	1%
18. 特に困っていることはない	6	1%	3%	0	0%	0%
計	933	100%		144	100%	



■まちの概況と課題：交通

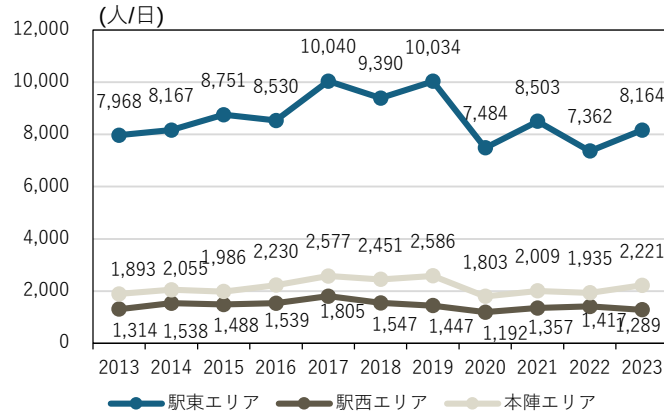
歩行者 通行量

休日の歩行者は駅東エリアは増加傾向
駅西エリアは減少傾向、
本陣エリアは横ばいで推移

平日

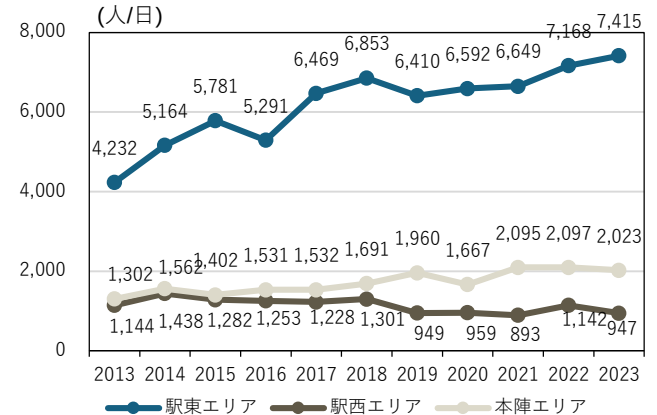
歩行者通行量の推移を見ると、草津川跡地公園が供用開始した平成29年（2017年）以降、駅東、本陣エリアが増加しましたが、新型コロナウイルス感染症がまん延した令和2年（2020年）は、すべてのエリアで、平日の歩行者通行量は大きく減少しています。

休日の歩行者通行量は、駅東が増加傾向にあるものの、駅西エリアは減少傾向にあり、本陣エリアは横ばいで推移しています。



（出典：草津市）

休日



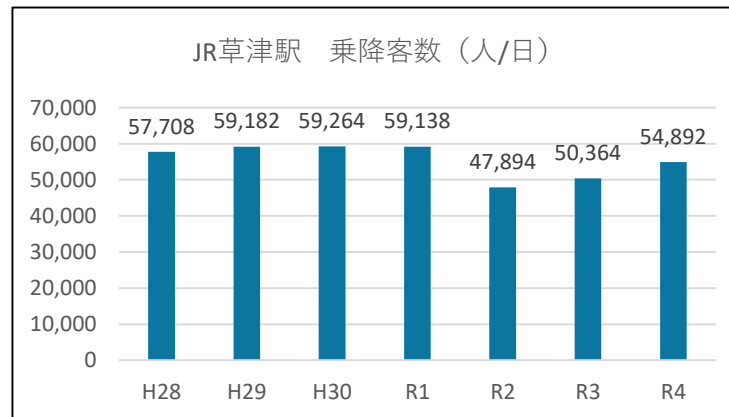
（出典：草津市）

駅利用者

草津駅利用者は県内で最も多く、
コロナ禍による減少も、回復傾向
にある

草津駅の利用者数は、令和2年以降は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、大きく減少したが、現在は回復傾向にあります。

また、草津駅の利用者数は県内で最も多く、滋賀県の中心的な駅として利用されています。



令和4年度 滋賀県内乗降客数

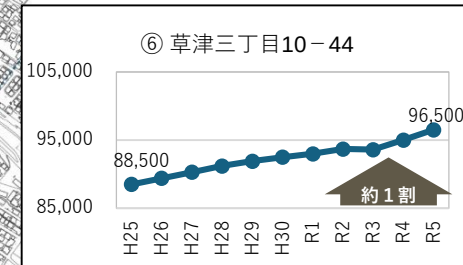
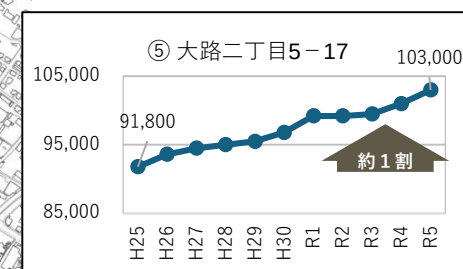
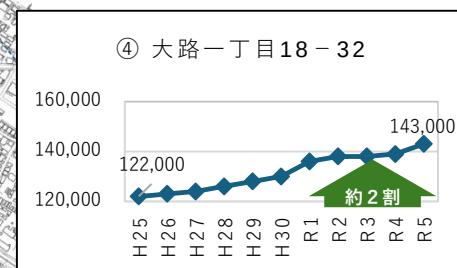
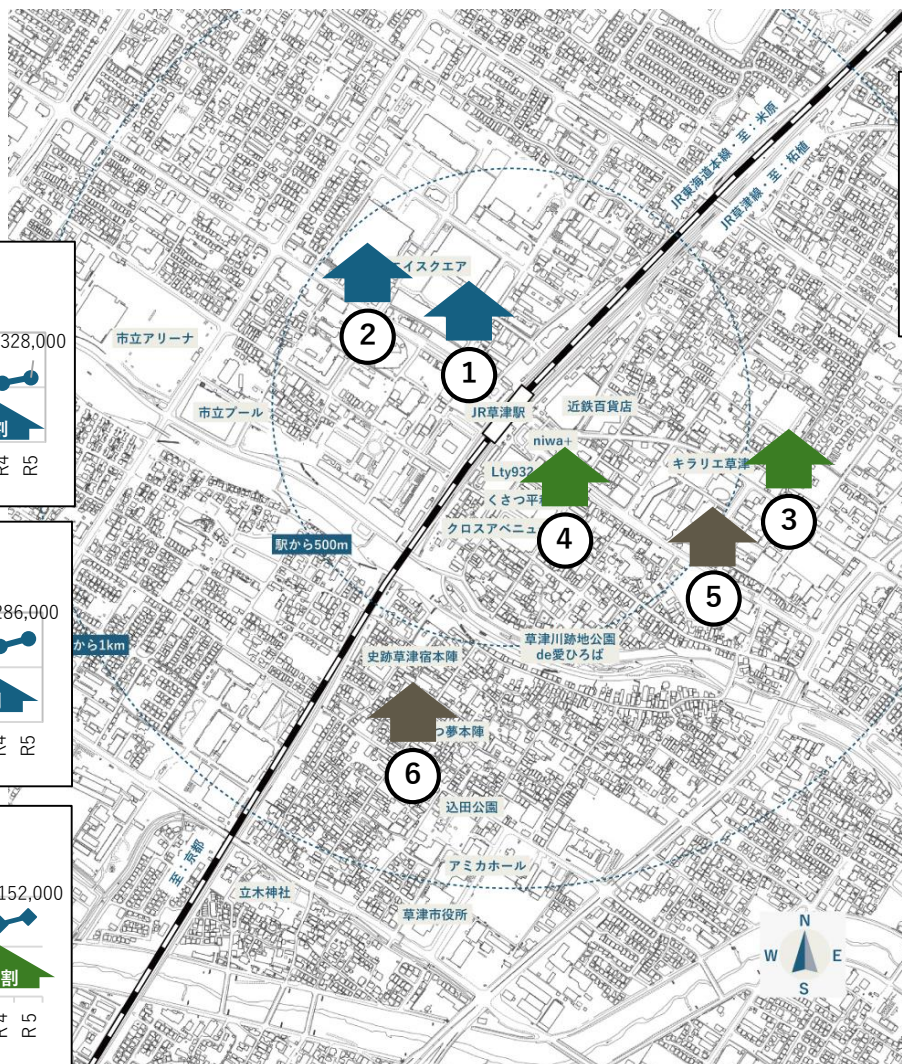
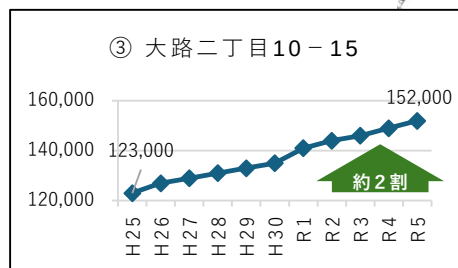
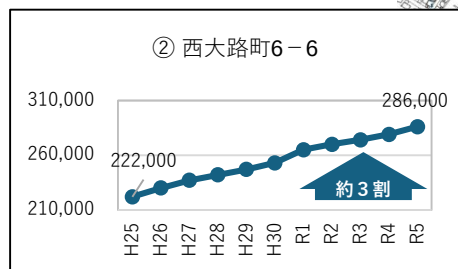
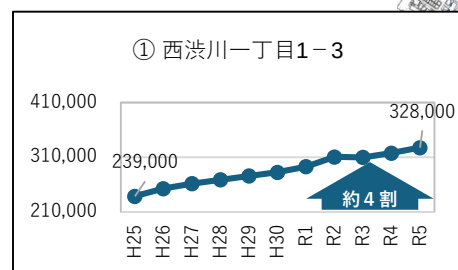
順位	駅名	乗降客数 （人/日）
1	草津	54,892
2	南草津	50,766
3	石山	39,880
4	瀬田	32,884
5	守山	32,206
6	大津	32,150
7	近江八幡	30,186
8	野洲	25,726

（出典：国土数値情報（駅別乗降客数データ））

基準地価
商業地

(出典：草津市)

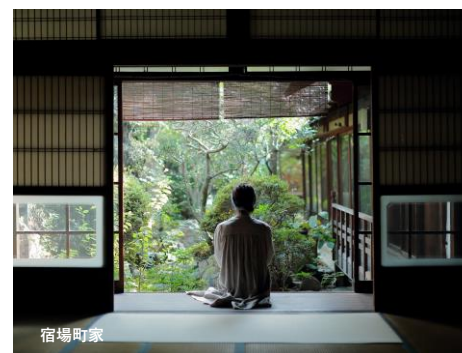
草津駅周辺の地価（商業地）は、全体として上昇傾向にあります。エリア別にみると、東口・本陣は緩やかに上昇する反面、西口は急速に上昇しています。



4. まちなかの魅力資源



県内一の乗降客数を誇る
JR草津駅



都市の可能性を宿す未利用地



県内外からひとを呼び込む
大規模スポーツ施設



低未利用地の活用による
憩いとにぎわいの空間



継承される豊かな地域文化



個性あるお店や場所

出会いと交流が生まれる市民活動



昼夜を問わない多様なライフスタイル

COLUMN

ウォーカブルなまちづくりがめざすもの

今、日本全体が抱える課題として、人口減少や生産年齢人口が減少し、都市の経済力が弱くなることが危惧されており、限られた資源のなかで、いかに生産力を高めることができるかが課題となっています。また、情報インフラの発展により可能となった、場所を問わない選択肢のある働き方や、性別や年齢層など、固定概念にとらわれない多様性が尊重される社会への転換がすすんでいます。一方、暮らしの観点においては、単身者世帯が増加し、地域コミュニティのような繋がりが希薄化していることから、社会からの孤立なども問題視されています。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大以降、制限された生活が余儀なくされる中、ライフスタイルの多様化が急速にすすみ、リアルなつながりを求めるオープンスペースの在り方を再認識し、あらためて見直す機会となりました。

今、国が推奨している「ウォーカブルなまちづくり」は、公にひらかれた道路や公園など公共空間などを快適にすることで、リアルにつながる“偶然の出会い”を生みだし、交流から生まれるコミュニティと、挑戦からはじまるイノベーションによって、まちの魅力を向上させ、内外の多様な人材・関係人口を呼びこむ循環を引きだし、経済成長につながる価値の創造や、地域課題の解決につないでいこうというものです。未来ビジョンでは、国が示すウォーカブルなまちづくりを主たる手法とし、草津市におけるめざす将来像を描きます。



シビックプライド醸成への期待

未来ビジョンの中で、たびたび登場する「多様性」という言葉。さまざまな価値観や多様化するライフスタイルを尊重することが注目される一方、同時に社会課題や求められることも複雑になり、個々の課題に寄り添ったきめ細やかな対応が求められています。これらの課題解決にむけ、支え手・受け手という関係を超えて、行政と市民や民間事業者・団体等、まちを構成するさまざまな主体が、多角的な視点で、それぞれの得意や知恵を持ち寄り、時には補い合いながら、ともに考え工夫していく「共創」の実践が、解決の糸口になり得ると考えています。

その実践にあたっては、“じぶんごと”として能動的にまちに関わろうとするシビックプライド（まちへの誇りと愛着）を、認識し顕在化することから始まります。そのきっかけのひとつとして、未来ビジョンをつくる過程では、将来、このまちで自分のありたい姿を想像し、集まる人たちとまちを語り描き、だれもが共有できるものとして、めざす将来像を積みあげてきました。

それぞれのシビックプライドを醸成させ、前述のウォーカブルなまちづくりを展開することで、まちの文化的価値や経済的価値などさまざまな価値が高まり、その結果として、定住人口や関係人口の維持や増加などの効果をもたらすものと考えています。また、自身が感じたまちなかの魅力を、等身大の言葉で内外へ発信することで、まちのファンを増やす循環が生まれることを期待しています。





くさつの

これからを導く

旗じるし

まちの未来を描き、めざす将来像を掲げる

5. みんなの未来ビジョンを考える

■「草津駅周辺エリア未来ビジョン」の位置づけ



草津駅周辺エリア未来ビジョンとは

未来ビジョンは、今後10年間の草津駅周辺のまちづくりについて官民共通のすすむべき指針として策定をするものです。

このため、未来ビジョンでは、他の行政計画と異なり、官民連携による事業の実践を調整する組織として、行政・市民・民間事業者など、多様な関係者で構成する「くさつまちなかエリアプラットフォーム」を設置し、それぞれが得意を持ち寄り、「共創」によって、めざす将来像を実現するものです。

つまり、未来ビジョンは、計画に基づいて事業を実施するという、課題解決型の計画ではなく、未来ビジョンがめざす将来像を、官民が絶えず協議、連携しながら、時には手法を変えてチャレンジする未来創造型の計画と考えています。

未来ビジョンの計画期間は、令和7年度から16年度までの10年間とし、実践に向けたロードマップを設定した上で、概ね5年を目途に見直しを行うものとしします。

くさつまちなか エリアプラットフォームとは

くさつまちなかエリアプラットフォーム（以下「プラットフォーム」という。）は、未来ビジョンに描いた、めざす将来像を実現するため、多様な関係者が相互に連携して取組をすすめていく「共創」の舞台です。

プラットフォームは、これまでの中心市街地活性化協議会の役割を引き継ぐとともに、新しく、まちに関わる全ての人にひらかれた組織として、「デザイン会議」を設置し、まちのHUB（結節点）※として、多くの人をつなぎ、チャレンジを応援します。

持続可能な社会の実現（SDGs）



持続可能な開発目標（SDGs）は、平成27年9月の国連サミットで採択された国際目標で、令和12年までに達成すべき17のゴールと169のターゲットで構成され、「地球上の誰一人として取り残さない」ことを理念に掲げています。未来ビジョンでは、次の3つの目標を関連目標と掲げ、SDGsの視点を意識した取組を推進していきます。

※ HUB：車輪やプロペラの中心部のことで、そこから転じて物事の中心や中核、あるいはネットワークの結節点として機能する存在の意味で用いられる。

■対象エリアの設定

未来ビジョンが示す「草津駅周辺エリア」は、中心市街地活性化基本計画で取り組んできた中心市街地計画区域（197ha）を踏まえつつ、立地適正化計画におけるJR草津駅周辺地区の都市機能誘導区域※1を基本にエリア設定を行いました。

また、対象エリア内には、令和2年度に滞在快適性向上区域※2を指定しており、未来ビジョンの取組と整合を図る必要があるため、未来ビジョンの策定において同時に見直しを行います。



- 対象エリア
- 滞在快適性等向上区域



※1 都市機能誘導区域：医療・福祉・商業などの都市機能を都市の中心拠点や生活拠点に誘導し集約することによりこれらの各種サービスの効率的な提供を図る区域。

※2 滞在快適性等向上区域：通称「まちなかウォークアブル区域」と言い、まちなかにおける「居心地が良く歩きたくなる」ひと中心の空間づくりを促進するため、歩道の拡幅、都市公園に交流拠点の整備、建物低層部のガラス張り化するなど、その区域の快適性・魅力向上を図るための整備などを重点的に行う区域。

6. みんなで考え描くまちの未来

■ 中心市街地活性化協議会によるワークショップ

未来ビジョンの策定にあたり、中心市街地活性化協議会に参画いただく委員の方々とともに、これまでの活性化の取組を総括し、まちの変化と成果を共有。30年後のまちについて意見を交わしていただきました。



令和6年1月29日(月)開催 草津市中心市街地活性化協議会 第2回全体会議

草津川跡地公園周辺がにぎやかに 駅前のにぎわいをもう一度

【草津駅】

- ・草津駅のリニューアル
- ・駅裏線の拡張
- ・駅東西のビル化
- ・ゼロ番線の活用
(草津川跡地公園への
あたらしい動線)

【駅前エリア】

- ・草津駅の駅デッキ拡張
- ・定期市の開催
- ・駅デッキとつながる
あたらしい公園

スポーツ施設と まちの暮らしの 共存を考えたい

【まちづくりセンター跡地活用】

- ・こども向け公園（遊具・芝生広場）
- ・第3の図書館（防災の役割も担う）
- ・烏丸半島への定期便バスの運行（宿泊客の早朝ランニング）

【交通課題の解消】

- ・バスターミナルの充実
- ・ロータリーの改修
- ・高速バスの発着
- ・空飛ぶクルマの駐車場

広域の生活経済に貢献したい

【警察署・合同ビル跡地活用】

- ・防災センター
- ・マンション住人向け広域避難所
- ・こども向け公園（遊具・芝生広場）
- ・大病院の建設・大規模公園の整備
- ・児童支援センター
- ・スタートアップ拠点（産業集積）
- ・立命館大学との連携
- ・県庁の移転など
- ・老朽化したハローワークや税務署、
草津保健所などの集約

【駅西エリア】

- ・区間3・4の開発、スポーツエリア化
- ・自動運転・空飛ぶクルマの発着場
- ・草津川跡地にボーリングして水を出す

【草津川跡地公園】

- ・草津川跡地公園をキャンプ場にして
川から緑をまちに広げ、市民の手で
ガーデニングがされている風景

【びわ湖】

- ・びわ湖までの遊歩道を整備し、
中心市街地からびわ湖を感じら
れる仕掛け
- ・びわ湖まで行けるケーブルカー

まちの公共空間が
もっと使いやすくなるといい

まちを歩く人が増えた 同時に車も増えた 歩行者空間の安全が心配

【ウォーカブル】

- ・東海道と中山道を歩行者天国にする
- ・東海道と中山道の歩道拡幅
サイクリング道路の整備
- ・駅前から商店街に動く歩道を整備
- ・車が通れる道と通れない道を分ける

【観光】

- ・東海道と中山道を世界遺産登録
- ・VR観光（立木神社、七福神めぐり）
- ・日本一有名な宿場町にしたい
- ・宿場をいかした宿泊施設

通りを歩く人は増えた
風情ある建物が減り
宿場町の景観が失われて
いる

【歴史やアート】

- ・歴史好きが集まれる空間
- ・空き家にアーティストを招きアートなまち
- ・外国人が宿泊し朝、庭の花に水をやる風景
- ・東海道に手仕事やアート市がならぶ

■KUSATSUまちなかクロッキー会議

未来ビジョンの策定にあたり、全4回からなるKUSATSUまちなかクロッキー会議（以下「クロッキー会議」という。）を開催しました。クロッキー会議には、草津に住む人、働く人、地域で活動をしている人、まちづくりに関心のある人、人と話すことが好きな人、絵を描くことが好きな人など、年齢層も幅広く多くの方々が集まり、将来実現したいまちの風景や、自分の実現したいことを、5つのエリアを意識しながら描きました。みんなで描いたイラストは、「くさつDREAM MAP」に映し「めざす将来像」を導きだしました。



みんなのイラストを鑑賞しよう

ワークショップで描かれたイラストは鑑賞いただけます。こちらのQRコードをお読み込みください。

QR

●KUSATSUまちなかクロッキー会議 開催スケジュール



クロッキー会議から見えた“まちのこと”

●駅西エリア

スポーツ施設が充実／宿泊・商業機能も充実／旅行者やスポーツ選手と交流できる場所が少ない／防災拠点が少ない／駐車場が不足／緑が少ない／スポーツブランディング／越境し共鳴しあう／車が多い／家族や友達と楽しめる場所が少ない／交流スペースが少ない／まちづくりセンター跡地の活用

など

●駅前エリア

まちの玄関口／もっと使いたい／商業機能が充実／滞在快適性の向上／草津市の顔／待ちあわせ場所／ひとをむすぶ場所／宿場テイストな空間／チャレンジの舞台／多様なアクティビティを受け入れる／情報発信を強化／使用手続きが分からない／使いにくい／都会的イメージ／緑が少ない／学習塾が集積

など

●駅東エリア

マンションが多い／新旧住民の交流が少ない／コミュニティが希薄／交流スペースが少ない／商業機能が充実／医療が充実／子育て施設が充実／事業所が少ない／昼間の賑わいが無い／居酒屋が充実／客引きなどで夜がこわい／人と車が輻輳／新たなモビリティ／再開発が活発／都市化が著しい／警察署跡地の活用

など

●公園エリア

毎月たくさんのイベント開催／ゆとりあるオープンスペース／緑あふれる空間／使用手続きが分からない／使いにくい／ルールづくり／キッチンカー、仮設店舗の導入／日常的にぎやかさ／市民活動・管理／魅力の維持／老若男女が楽しめる／変化するニーズへの対応／「使う」と「守る」の循環

など

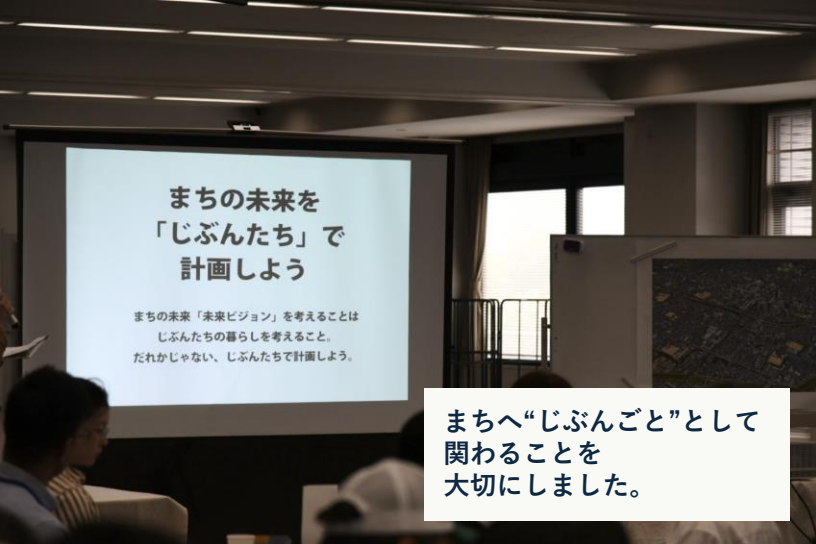
●本陣エリア

文化・芸術が感じられる／歴史があり景観が残っている／静寂に佇む／草津の原風景／本物志向／旅人を受け容れてきた宿場／出会い＝資産／個性ある店舗が点在／新しいビジネスの場／チャレンジの舞台／空き家が多い／老朽家屋が多い／人と車が輻輳／新たなモビリティ／街道と緑がまじわる／無電柱化／まちづくりセンターとの連携

など

みんなで描いたイラストを
「くさつDREAM MAP」に映し「めざす将来像」を導きだしました

クロッキー会議のようす



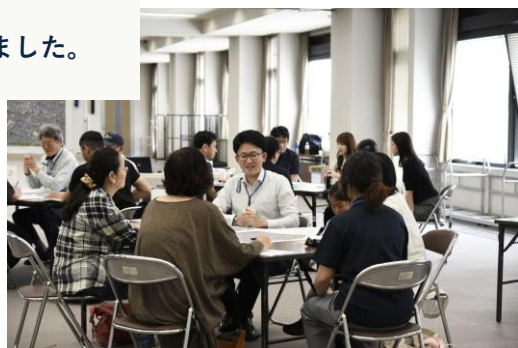
まちへ“じぶんごと”として
関わることを
大切にしました。



言葉だけでなく
描くことで
想いを可視化しました。



意見を聞いたり
話すことで
新しい発見や
共感が生まれました。



みんなの想いを
ひとつにまとめると
まちのイメージが見え
さらに想像が膨らみました。



多様な人々が集い
さまざまな意見が重なりあう
まちの未来を共創する場



得意を活かした
チャレンジを実践



日常的に
まちを語り描く場が
ひらかれていることが大切



※クロッキー会議を通して、まちの未来を自由に想像し描いたもので、場所や人は特定するものではありません。



7. とともに掲げる旗じるし

■めざす将来像

これまでの取組を振り返り「めざす将来像」を示します。

初めに、草津駅周辺が果たすべき役割を掲げ、その上で、草津市において実現したいまちの将来像を設定します。

将来像は、対象エリア全域を示すものとして、各エリアの個性に応じたコンセプトにより具体化します。

次に、将来像およびコンセプトを実現するため、各エリアに共通する方針と戦略を定め、各エリアのコンセプトに応じた具体的なアクションを実行します。アクションは、調査・分析から始まり、社会実験などのトライアンドエラーを繰り返して、将来像の実現をめざします。

<役割と将来像>

滋賀県南部地域の中核となる草津駅周辺エリアの果たすべき使命として、県民の暮らしと経済を牽引し、広域の発展を生み出す活力の源泉となることを役割として掲げています。

そして、「多様」な価値観を持ちあわせた人々が出会い、交流することで、新たな発見やアイデアを紡ぎだし、ともに実践する「共創」※と「挑戦」が循環する、「健やか」なまちで、「健やか」なひとの「暮らし」が実現するまちの姿を将来像として掲げています。

※<共創>

草津駅周辺では第6次草津市総合計画における、重要な視点である「協働」によって、新たな価値を創造する「共創」をめざします。



■ 5つのエリアとめざすコンセプト



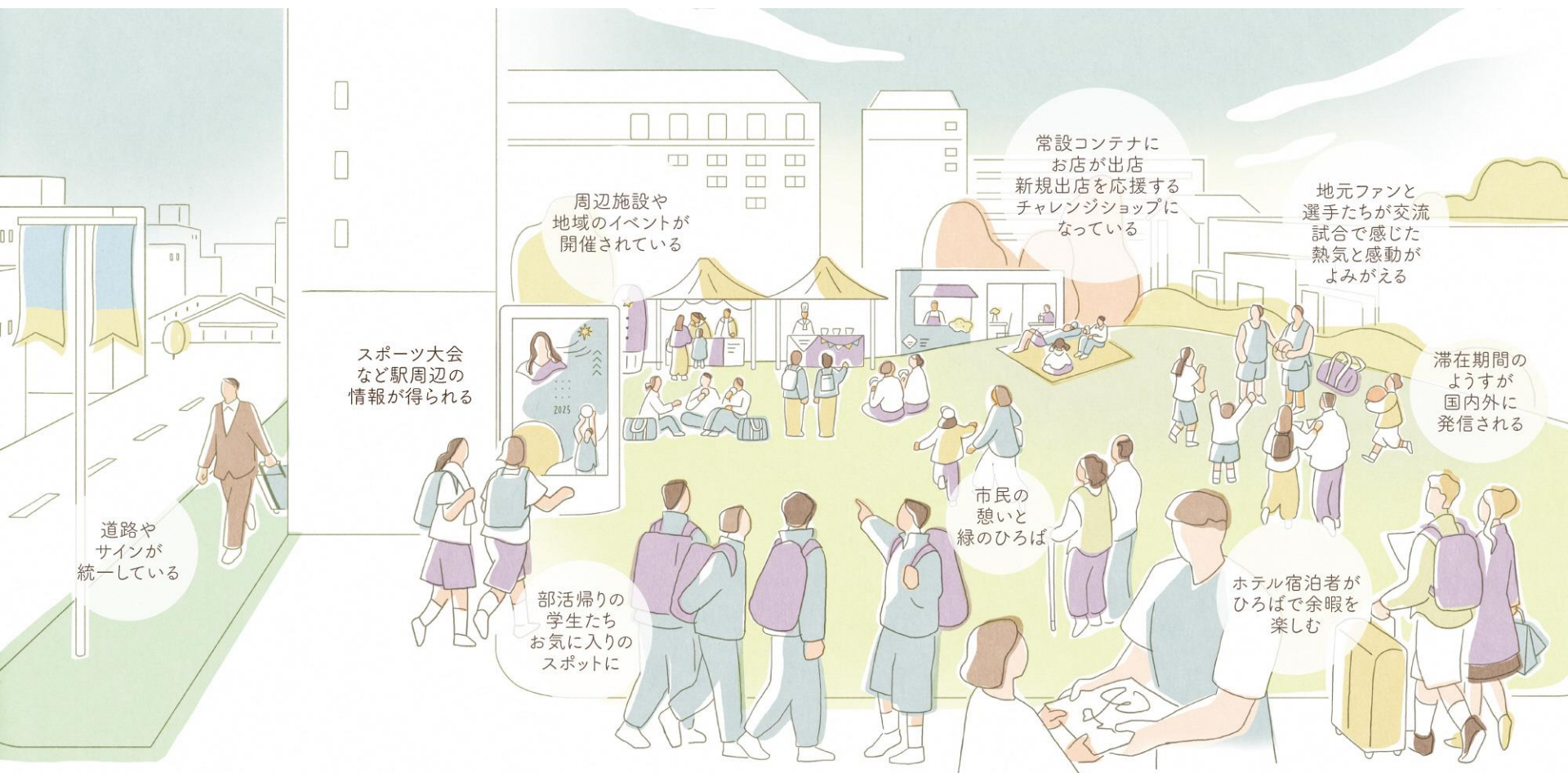
3つの方針に基づく戦略を組合せることで具体的なアクションを実践し、各エリアのコンセプトを具現化します。

方針	戦略	アクション
「デザイン」	空間活用	公共空間などまちの空間を使いこなす
	都市緑化	緑の活動がまちにひろがる
「ブランディング」	情報共有	まちの情報が広く発信され共有できる
	シティプロモーション	イメージを共有し誇らしいまちを育てる
「マネジメント」	施設連携	まちでつなぎ相乗効果を生み出す
	市民共創	多様な関わりが新たな価値を創造する

対象エリアは、中心市街地活性化基本計画において位置づけられた、歴史街道軸、草津川跡地軸の2軸によって生まれる個性をもつ3つのエリアに、新しく2つの個性を持つエリア（「公園エリア」、「駅前エリア」）を追加し、未来ビジョンでは5つのエリアとしました。

それぞれの個性を活かしたコンセプトを設定し、右図に示す戦略を組み合わせ、具体的なアクションを実践することで、5つのエリアの個性を活かしたまちづくりをすすめます。

駅西エリア



風景イメージ

市民交流の拠点であったまちづくりセンター跡地を、店舗やイベントで賑わう緑のひろばとして利用することによって、周辺のホテルに滞在される方や、スポーツ大会帰りの選手などの来街者をはじめ、地元の学生や住民などが気軽に立ち寄り、日常的な交流が育まれることで、ここにしかない賑わいの風景をイメージしています。

エリアコンセプト

熱気と感動あふれる 暮らし彩る交流のまち

全国から多くの人を訪れるプールやアリーナといったスポーツ施設から熱気と感動があふれ、その熱量や感動が、まちを訪れる人、暮らす人にも伝播し、他者とのつながりや交流を促し、大型商業施設やホテルは、非日常を受け入れるだけでなく、日常での交流も生み出します。多様な人々の交流が、日々の暮らしに彩りをもたらすようなまちをめざします。

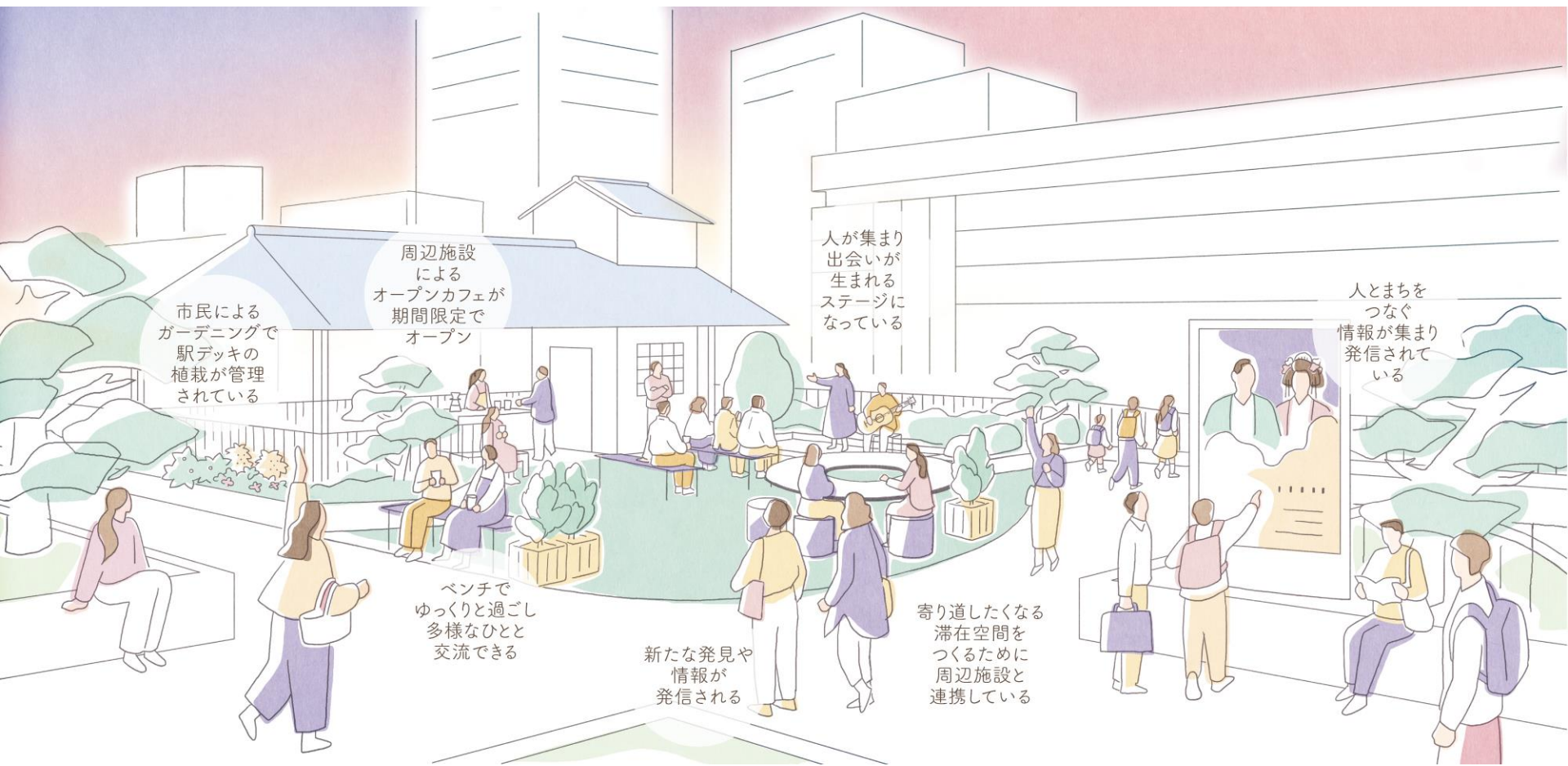
実現にむけた取組

方針	戦略	アクション
「デザイン」	空間活用	- まちづくりセンター跡地を、当面の間、市街地のオープンスペースとして、店舗とイベントで賑わう緑のひろばとしての利用について検討します。 - 駅からスポーツ施設までの道のりを、来街者にとって分かりやすく、歩きたくなる空間となるよう統一感あるサインや路面標示のデザインを検討します。
	都市緑化	
「ブランディング」	情報共有	- 他の施設が実施するイベント情報を、施設の垣根を越えて発信するため、公共施設や公共空間での情報発信機能の強化を検討します。 - スポーツを核とした地域ブランディングを浸透させながら、都市を挙げたスポーツ大会の誘致に向けたシティプロモーションについて検討します。
	シティプロモーション	
「マネジメント」	施設連携	- プラットフォームを活用し、スポーツ施設の指定管理者や地域の商店街やホテルなどの連携に向けて協議・検討する機会を創出します。 - プラットフォームを活用し、新たに設定するウォークアブル区域を見据えて、使いやすい緑のひろばとしての利用に向けた社会実験を、市民参加により実施し、利用ルールや維持管理の方法を検討します。
	市民共創	

風景イメージが示す場所



駅前エリア



風景イメージ

ステージを使って市民が自分の得意を発表できたり、事業者が気軽にオープンカフェなどを出店できたり。それを囲むように、緑で区切られた空間にはベンチやテーブルが設えられ、これまで通り過ぎるだけだった場所に多くの人が立ち寄り、ゆったりとした滞在空間のなかで、ゆるやかな出会いと交流を育む風景をイメージしています。

エリアコンセプト

いつもの寄り道が出会い育む 高質な都市空間

県内一の乗降客数を誇る草津駅は、滋賀県の広域結節点に相応しい、利便性豊かで多様な人が行き交う立地という強みを活かし、出会いの“きっかけ”を生み出す、“寄り道”したくなる舞台、踊り場のような、ひと息付いて、滞在したくなるような心地良い、高質な都市空間の形成をめざします。

実現にむけた取組

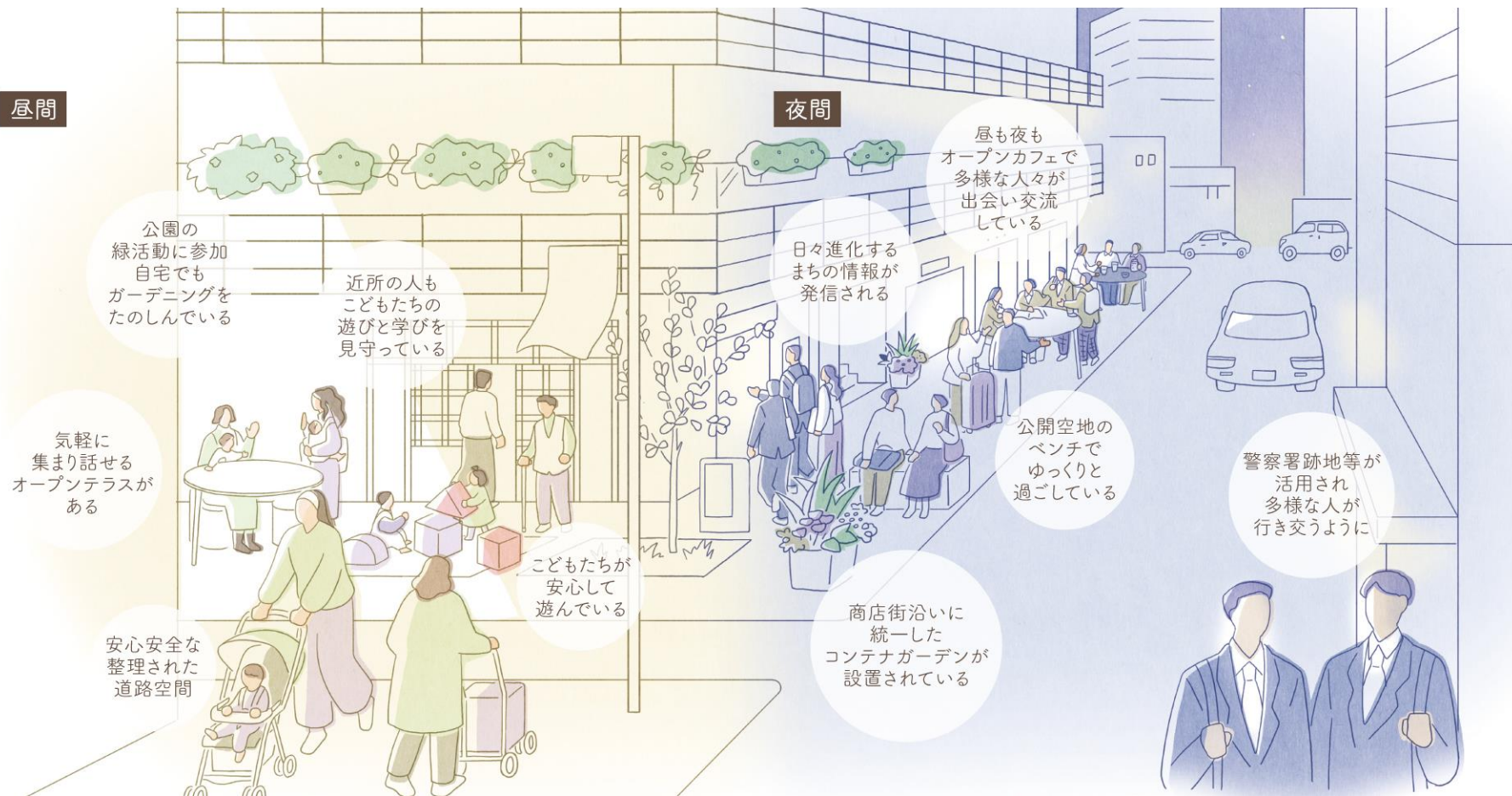
方針	戦略	アクション
「デザイン」	空間活用	- 駅デッキを、誰にとっても使いやすく、滞在が快適な空間となるよう検討します。 - 駅デッキの花壇などを利用し、季節の草花など四季を感じられるガーデンの創出を検討します。
	都市緑化	
「ブランディング」	情報共有	- まちなかの施設への集客を促進するため、人が多く集まる場所の特性を活かして、まちなかのイベント情報が効果的に発信できるよう、情報発信機能の強化を検討します。 - 市民同士のつながりを広げ、SNSなどを利用し、駅デッキを舞台とした様々な賑わいの魅力を、内外へと発信することを促進します。
	シティプロモーション	
「マネジメント」	施設連携	- プラットフォームを活用し、周辺商業施設とJR草津駅などとの連携に向けて協議・検討する機会を創出します。 - プラットフォームを活用し、使いやすいデッキの整備に向けた社会実験を市民参加により実施し、利用ルールや維持管理の方法などの仕組みを検討します。
	市民共創	

風景イメージが示す場所



駅東エリア

昼間



風景イメージ

市街地再開発で生まれたオープンスペースには、歩行空間と店舗をゆるやかにつなげ、ひとが滞在したくなるベンチなどが設置され、昼間は、子育て世帯の交流やこどもたちの遊び場として、夜間は、仕事帰りの人同士の憩いの空間として、昼と夜とで表情の異なるいつもの賑わいの風景をイメージしています。

エリアコンセプト

表情豊かないつものまちかど 次代を育む多様性のまち

マンション建設とともに人口が増加しつつも、かつての商店街の面影残る利便性の高い、このエリアのまちかどは、まちのなかでも多くの人が行き交う公共空間であり、昼と夜では使う人も異なり、様々な顔を持つ表情豊かな場所です。いつものまちかどから生まれる多様な人々の交流を通じて、次代を育む多様性のまちをめざします。

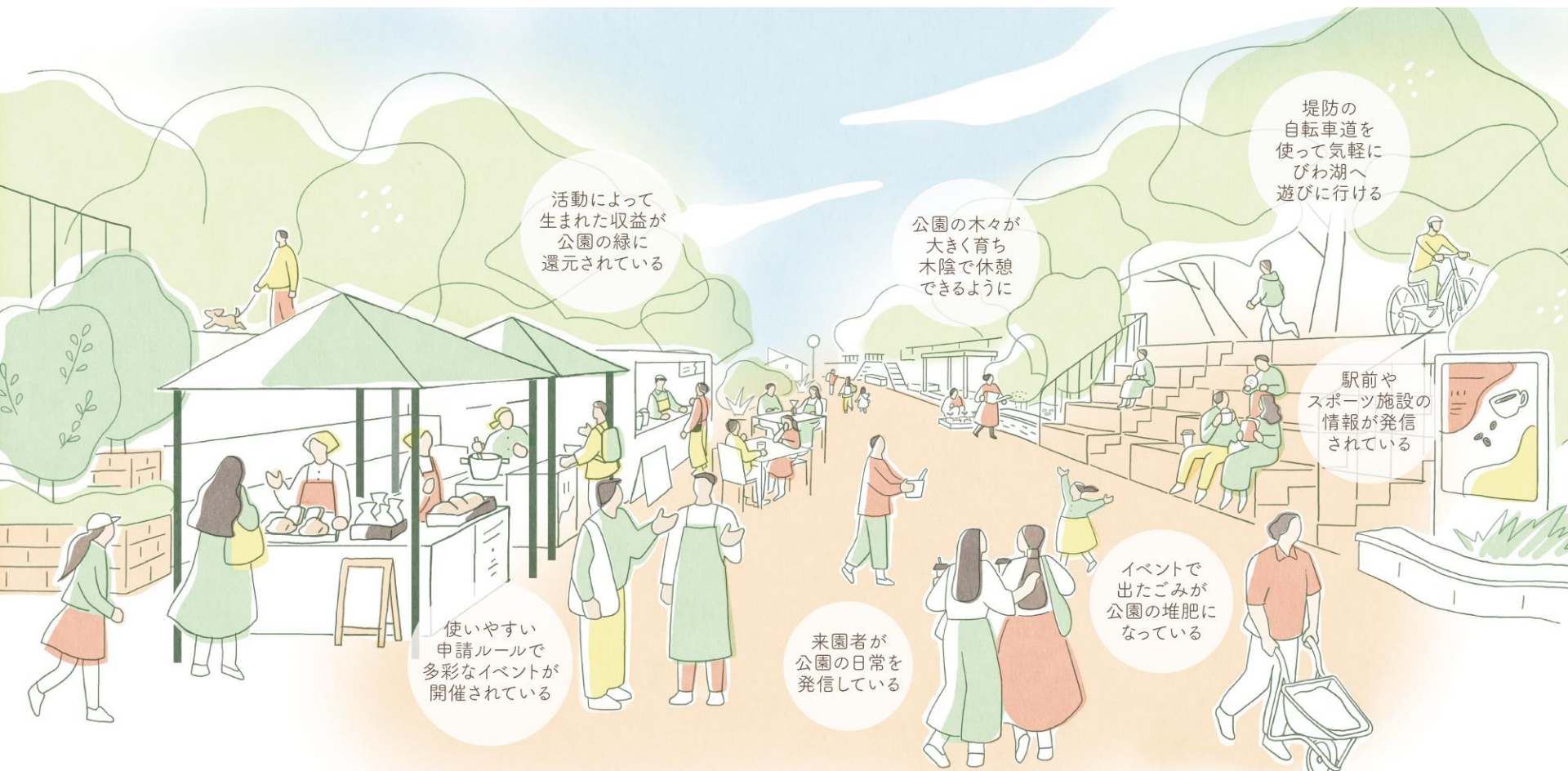
風景イメージが示す場所



実現にむけた取組

方針	戦略	アクション
「デザイン」	空間活用	- 市街地再開発で整備された、貴重なまちなかのオープンスペースを、誰にとっても使いやすく、滞在が快適な空間となるよう検討します。 - 草津警察署跡地等のまとまった遊休地の活用について、県南部地域の発展を生み出す活力の源泉となるよう検討します。 - 緑豊かな草津川跡地公園へとつながる通りやオープンスペースを統一感あるコンテナガーデンで彩ります。
	都市緑化	
「ブランディング」	情報共有	
	シティプロモーション	- 来街者にとって分かりやすく、歩きたくなる空間となるよう統一感あるサインや路面標示のデザインを検討します。 - まちなかのイベント情報を発信することで、まちなかの回遊性を促進するため、オープンスペースでの情報発信機能の強化を検討します。 - 駅東エリアの多様性をまちの魅力としてブランディングを行い、市内外へと発信することを検討します。
「マネジメント」	施設連携	- プラットフォームを活用し、使いやすいオープンスペースに向けた社会実験を市民参加により実施し、利用ルールや維持管理の方法などの仕組みを検討します。 - プラットフォームを活用し、車を抑制したひと中心の空間づくりに向けた社会実験を市民参加により実施します。
	市民共創	

公園エリア



風景イメージ

草津川跡地公園は、いつもイベントで賑わい、多くの人達が訪れ、マルシェなどでは出店者と来園者だけでなく、来園者同士で会話を楽しむ人もいれば、一人でのんびりと過ごす人、いつもと同じように公園を訪れ人もいます。そんな誰にとっても居心地の良い緑の空間をみんなで守り育てる風景をイメージしています。

エリアコンセプト

使いこなしが緑とまちを守りつなぐ 共創と循環の場

まちの中心部に位置する草津川跡地公園は、旧中山道と重なり、まちの東西と南北とをつなぐシンボリックな空間。

公園を舞台に、市民活動や民間事業者などの多様な活用が生まれ、使うほどに、公園が豊かになり、人々の寛容によって共創がすすみ、県内外から多くの方に利用されることで、公園を守りつなぐ循環が生まれる、持続可能な公園づくりをめざします。

実現にむけた取組

方針	戦略	アクション
「デザイン」	空間活用	- 県内外から人を呼び込む、魅力的なイベントが実施しやすくなるよう、利用者の使いやすさを高める仕組みづくりを検討します。 - 市民参加による公園内のガーデニングなど、都市の緑が広がる活動を支援します。
	都市緑化	
「ブランディング」	情報共有	- まちなかの回遊性を促進するため、スポーツ施設の大会情報やまちのイベント情報などを発信できるよう、公園内での情報発信機能を強化します。 - 市民同士のつながりを広げ、公園のファンを育て、個人のSNSなどを利用した公園の魅力発信を促進します。
	シティプロモーション	
「マネジメント」	施設連携	- プラットフォームを活用し、周辺公共施設との連携に向けて、協議・検討する機会を創出します。 - イベントにより生まれた収益が、公園の緑の保全に還元されるような、「使う」と「守る」が循環する利活用ルールを検討をすすめます。 - 自宅での堆肥づくりなど、市民が公園の緑を育成することに関わる仕組みを検討します。
	市民共創	

風景イメージが示す場所



本陣エリア



風景イメージ

車両の進入を規制した旧街道の空間で、昔から受け継がれてきた風景や歴史に想いを馳せる傍ら、新たに生まれる未来の息吹が感じられる旧山内邸を中心に、市内外から多様な人が集い、自分たちのお気に入りの場所や活動が広がっていく風景をイメージしています。

エリアコンセプト

温故を受け継ぎ 新しきを創造する宿場町

宿場町の豊かな文化を育んできた旧街道を、車中心から“ひと中心”の空間へと回帰させ、歩行者優先による歩くのがたのしいウォークブルな空間をめざします。

また、空き家など地域資源を受け継ぎ、県内外より訪ねたくなる魅力的なお店や、ギャラリーなどが路地裏に点在する、新旧が融合した新たな街道文化が創造されるまちをめざします。

実現にむけた取組

方針	戦略	アクション
「デザイン」	空間活用	- 訪れる人も暮らす人も安全で居心地が良いと感じられる、ひと中心の空間づくりに向けて、景観の保全や車両の抑制などの手法を検討します。 - 空き家、空き店舗を地域資源と捉え、利活用に向けた関心を高めることで、所有者の意識改革と物件の掘り起こしをすすめます。 - 旧街道やオープンスペースを統一感あるコンテナガーデンで彩ります。
	都市緑化	
「ブランディング」	情報共有	- 来街者に積極的に情報発信してもらえるような、コンテンツや仕掛けづくりを検討します。 - 歴史的なまちなみや街道文化を感じられる空間となるよう、統一感あるサインや路面標示のデザインを検討します。
	シティプロモーション	
「マネジメント」	施設連携	- プラットフォームを活用し、歴史的な景観や文化を活かしたまちづくりに向け、関係者との連携が図れるよう・協議・検討する機会を創出します。 - プラットフォームを活用し、新たに出店や、活動を行う人を応援する風土づくりや、支援できる仕組みについて検討します。 - プラットフォームを活用し、車を抑制したひと中心の空間づくりに向けた社会実験を市民参加により実施します。
	市民共創	

風景イメージが示す場所





くさつのこれからを
仲間とともに
つくる

めざす将来像を仲間とともに実現する

8. 未来への歩みをすすめる

■社会実験でチャレンジする

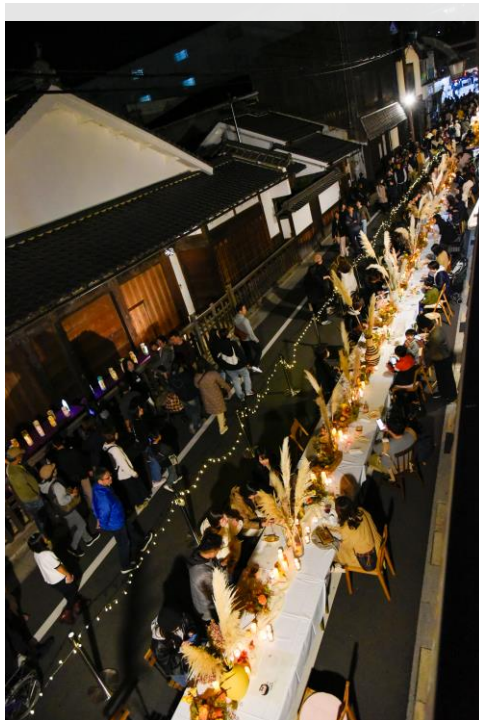
掲げたコンセプトを実現するための第一歩として、「本陣エリア」と「駅前エリア」の2つのエリアにおいて、社会実験を実施しました。

11/9 CHEF'S LONG TABLE

旧街道の“道路”を車中心から
“ひと中心”の空間へ



旧街道の一部を交通規制し、ひとが滞留する空間づくりにチャレンジ。
およそ30mのテーブルを並べ、地元シェフによる料理に舌鼓を打ちながら、無電柱化がすすみ、電線のないまちを想い美しい花々が添えられ行き交う人を惹きつける空間を演出。

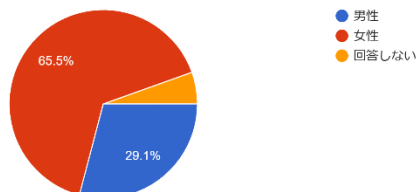


■社会実験の結果と検証

CHEF'S LONG TABLE

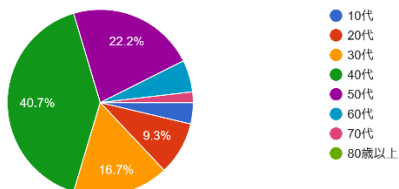
性別

55 件の回答



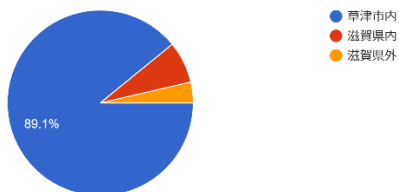
年齢

54 件の回答



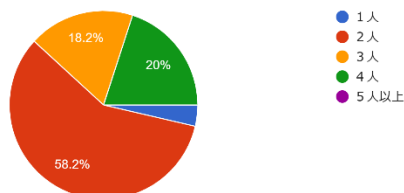
居住地

55 件の回答



ご自身を含めて何人で来訪されましたか。

55 件の回答

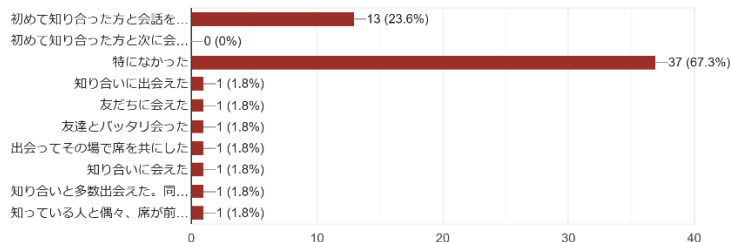


来場者数：約300人

イベント来場者に対してアンケート調査を行うため、来場者にランチョンマットを配布し、Q Rを読み込み回答いただいた。(55件回答)

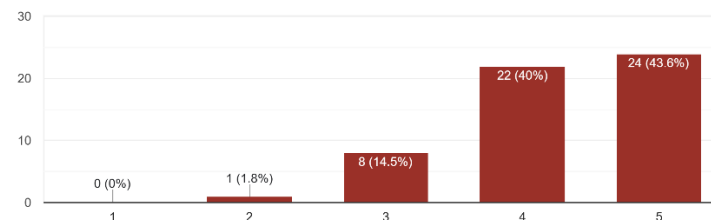
イベントを通じて「出会い」や「交流」はありましたか。(複数回答)

55 件の回答



催しの満足度を星の数で教えてください。(最高点5点)

55 件の回答



結果

市内在住の40～50代女性の回答が多く、友人同士またはパートナーと参加する方が多かった。出店者や会場装飾関係者が、主たるターゲット層とする属性に合致しており、目的性をもって来訪する方が多かった。

「初めて知り合った方と会話をした」が2割以上あり、「出会い」を生み出すことができた。会場演出や料理内容など、催しについて高い評価が得られた。

検証

イタリアンやフレンチなど子連れで入店しにくい飲食店が、公共空間に出店することで、子連れで来場しやすく好評だった。屋外だと、制限のかかるものごとが、公共空間の寛容性によって、やりやすくなったと感じた。

来場者同士や来場者と店舗など「出会い」を生み出すきっかけをつくったが、「交流」に至らなかった。「交流」を生み出すには長時間の滞在と、交流を促す仕掛けが必要であると考えられる。エリアの雰囲気にながら、質にこだわりつつ、新規性の高い催しをひらくことで、市民がまちに誇りを感じると考えられる。

11/16 チャレンジDAY

JR草津駅のデッキ空間を
日常的な“居場所”にしてみる

道路空間である駅デッキの一部を通行のためでなくひとが集まる場所として占有使用。
駅前エリアの風景イメージを意識して、人工芝を敷いた休憩スペースや、書道体験やカフェの出店などひとりひとりのチャレンジを応援する空間など、多様な人々が行き交い、出会いと交流のある風景をめざします。



■社会実験の効果と検証

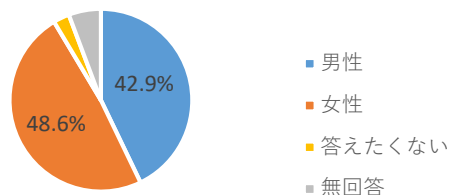
チャレンジDAY

来場者数：約50人

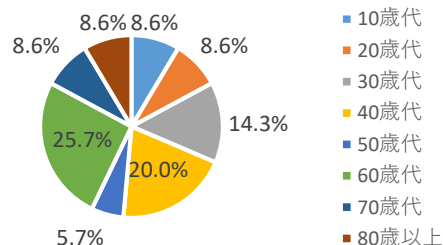
イベント会場で参加者に調査票を配布し、スタッフが聞き取り。

または調査票に掲載したQRコードからインターネット回答（35件回答）

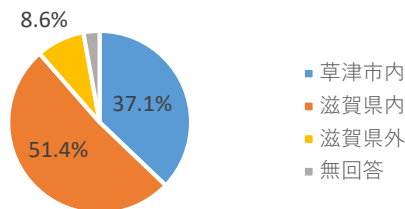
性別



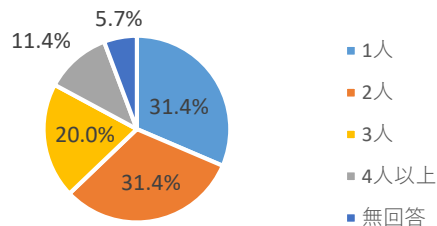
年齢



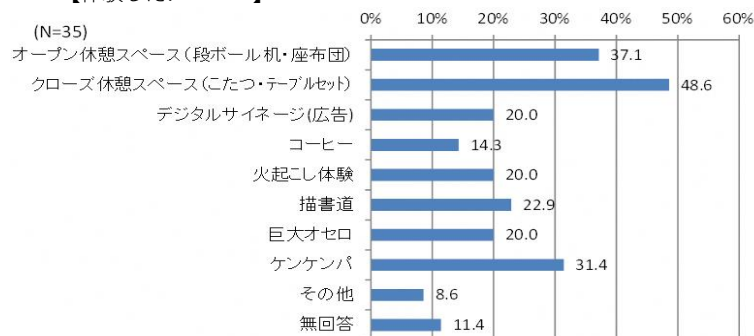
居住



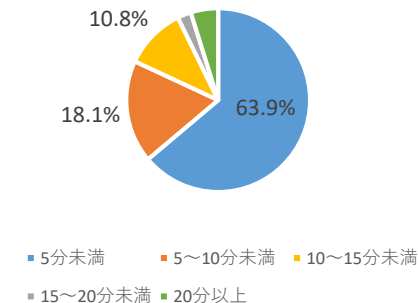
ご自身含めて何人で来訪されましたか



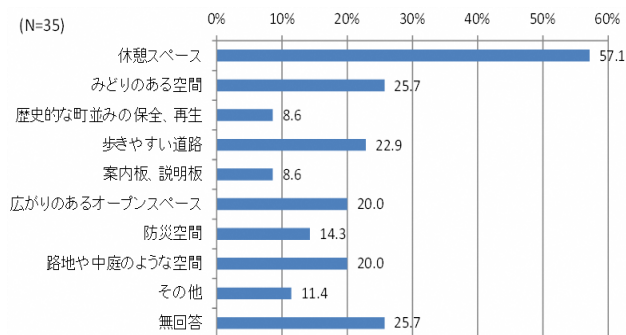
【体験したメニュー】



滞在時間



【今後、公共空間として何が充実すれば良いと思うか】



結果

市外の60代の回答が多く、家族、友人同士で参加される方と同等に1人で参加する方も多かった。

休憩スペースを利用する方が多かったものの、滞在時間としては5分未満の利用が多かった。

今後、何が充実すれば良いと思うかという問いについては、休憩スペースや、緑のある空間など駅前エリアに憩える場所を求める声が多かった。

検証

社会実験のメニューの中では、休憩スペースの利用が多く、ニーズ調査でも休憩スペースを求める声が多かったことから、快適な滞在空間の場づくりを進めることで、出会いや交流が生まれるきっかけの場となると感じた。

休憩スペースの作り方について、既存のベンチには学生がよく座り食事をしている風景が見られたが、今回設置のこたつやテーブルは少し恥ずかしいのか使用されなかったことから、日常化した風景を創り出す仕掛けが必要と感じた。

■滞在快適性等向上区域の設定

各エリアのコンセプトに描いた、ひと中心の空間づくりを実現するため、令和3年2月に草津市が指定した滞在快適性等向上区域（以下「まちなかウォーカブル区域」という。）を右図のとおり拡大します。

また、まちなかウォーカブル区域内への車両の進入を抑制するため、少し離れた公共施設の駐車場などをフリンジ駐車場として活用することについて検討を行います。

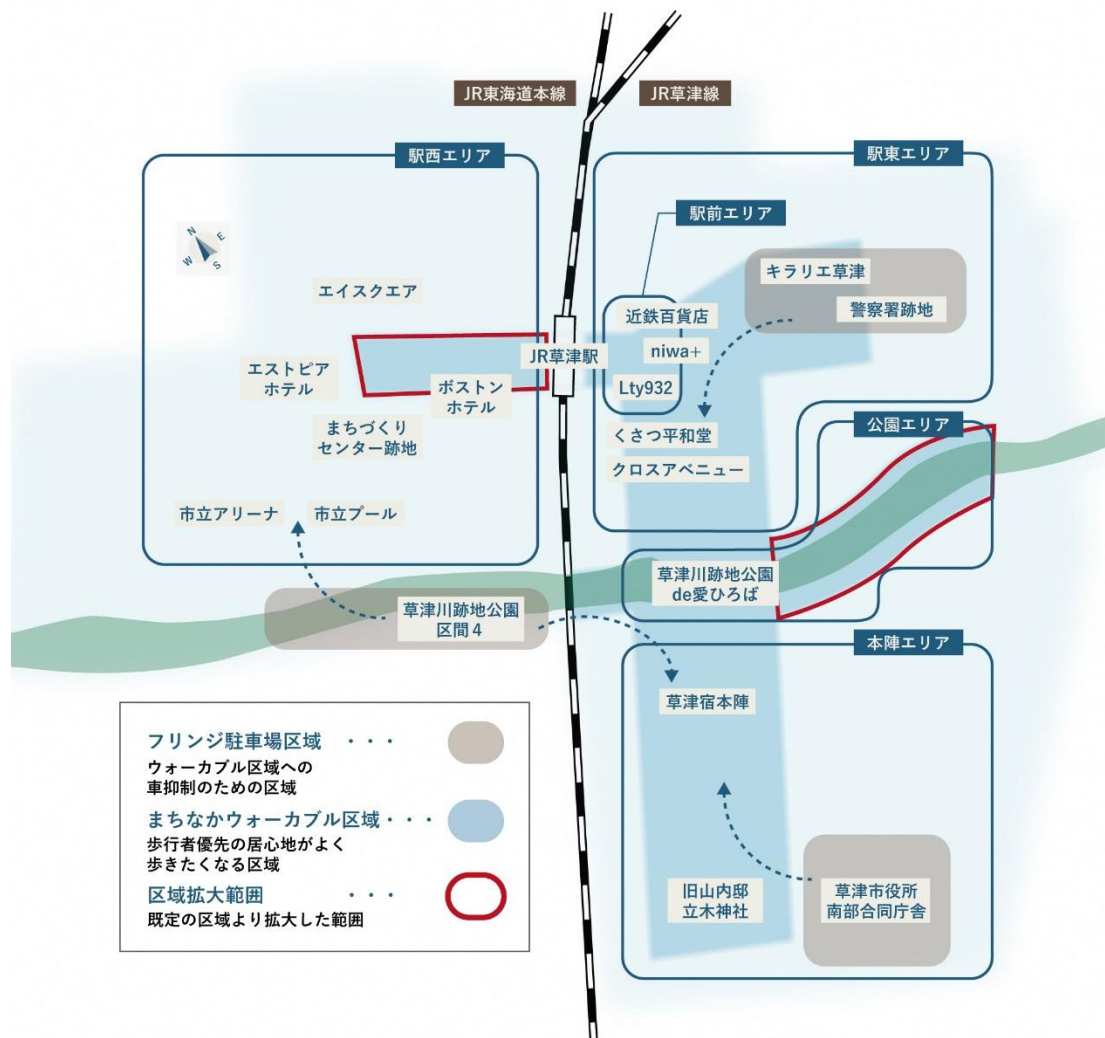
●駅西エリア

駅西エリアのコンセプトにおいて、まちづくりセンター跡地を滞在快適な空間として活用するイメージとしていることから、その周辺区域をまちなかウォーカブル区域に追加しました。

●公園エリア

公園エリアのコンセプトにおいて、多様な主体によるイベント等の活動が、居心地がよく、歩きたくする空間を作り出すことから、公園エリア全域をまちなかウォーカブル区域に追加しました。

また、都市公園内におけるイベント等の収益活動が、公園を守りつなぐことにつながるイメージとしていることから、事業者の収益活動を支援するため、公園エリア全域をまちなかウォーカブル区域に追加しました。

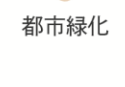
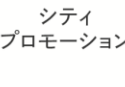


■ロードマップ/指標

めざす将来像および各エリアコンセプトの実現に向けたアクションの活動指標の達成を目標とし、プラットフォームを中心としたアクションをSTEP1～3の段階に分けて整理し、長期的観点をもちながら継続的にすすめていきます。

各指標は、継続的に調査分析し、取組の成果を可視化し、エリアプラットフォームで共有することで、それぞれの活動内容の見直しや改善等を行いながら、エリアの価値向上に繋げていきます。

また、将来像の実現状況を把握する上での参考指標として、地域幸福度（Well-Being）※指標を活用します。

方針	戦略		STEP-1 調査分析・検討	STEP-2 社会実験・育成	STEP-3 恒常化・拡充	指標の項目	令和 5 年 (基準値)	令和 11 年	令和 16 年	
「デザイン」 まちを する	空間活用 	各 エリア の ア ク シ ョ ン	空間資源の掘り起こし 使いにくさの調査分析	社会実験を通じた 使いやすい環境と ルールづくり	気軽に公共空間が 使えるようになる	まちなかウォークアブル 区域内で市が許可する イベントの件数	143 件	160 件	180 件	
	都市緑化 		緑の活動に関する 課題の調査分析	緑の活動の実践と 自立自走をめざす 活動の育成	緑の活動が まちなかに広がる	エリア内の 公共空間でのガーデニング 活動への参加人数	393 人	440 人	480 人	
「ブランディング」 まちを する	情報共有 		情報発信に関する 課題の調査分析	社会実験を通じた 情報プラットフォーム の試用	まちの情報が広く 発信され共有される	エリア内の 公共空間にある 情報掲示板の数	***	5 件	10 件	
	シティ プロモーション 		イメージや 将来像の検討	将来像の認知と 共感を促す活動の 実施と機運醸成	まちのイメージが共有 されシビックプライド が醸成されている	大規模なスポーツ・イベント (1,000 人以上) の開催件数	10 件	20 件	30 件	
「マネジメント」 まちを する	施設連携 		ステークホルダー による意見交換	社会実験を通じた 施設連携の効果検証と 参画者の拡充	施設がまちによって つながり相乗効果を 生み出している	エリアプラットフォームで 開催する 施設関係者会議の回数	***	5 件	10 件	
	市民共創 		多様な人が集う エリアプラット フォームづくり	運営参画者の拡充と コーディネーターの 育成	多様な人々が 関わり新しいことが 生まれている	デザイン会議の 参画者数	***	60 人	120 人	
参考	健幸						地域幸福度(Well-Being) 指標対象エリアの幸福度	6.7	第6次草津市総合計画における 地域幸福度(Well-Being)指標の 取り扱いを準用します	

■未来ビジョンの推進体制

くさつまちなかエリアプラットフォームとは

くさつまちなかエリアプラットフォームは、未来ビジョンに描いた「めざす将来像」を実現するため、多様な関係者が相互に連携、協力して取組を進めて行く「共創」の舞台です。プラットフォームは、これまでの中心市街地活性化協議会の役割を引き継ぐとともに、新しく、まちに関わる全ての人に開かれた機関として、「デザイン会議」を設置し、まちのHUB（結節点）として、多くの人をつなぎ、プロジェクトを立ち上げる人を応援します。

●ビジョン推進委員会

ビジョン推進委員会は、これまで、中心市街地活性化のまちづくりの初動期を支えてきた「中心市街地活性化協議会」が、その役割を深化させ、新たなまちの担い手たちを支え・活動を支援する承認機関として役割を担います。

●デザイン会議

デザイン会議は、まちの担い手たちが、まちづくり活動へ日常にかかわりをもつことができるよう「関わりしろ」として集まる機会をつくり、都市再生推進法人であるまちづくり会社、草津市や商工会議所が、まちと人を有機的につなぎ、やりたいことをプロジェクトとして立ち上げる人を支援します。

●世話役会

世話役会は、ビジョン推進委員会とデザイン会議をむすぶ役割として中間に設置します。デザイン会議から発案されたプロジェクトを、ビジョン推進委員会に対して予算承認や支援を得ていく調整を行います。

◎活動資金

プロジェクトの活動資金は、持続可能な自立した運営をめざし、受益者による出資、協賛金やクラウドファンディングの活用、補助制度や助成金の活用を主な活動資金源として各プロジェクト内で検討します。

プラットフォームでは、新たなプロジェクトが数多く輩出されることをめざし、プロジェクトの“活動初動期”を支えることを目的とした資金運営を行います。デザイン会議から発案されたプロジェクトは、世話役会を経て、ビジョン推進委員会にて承認を得ることとします。

未来ビジョンに掲げる将来像やコンセプトに合致した実効性の高いプロジェクトへの支援が可能となり、丁寧な承認プロセスを取ること、各プロジェクトの魅力が、さらに高まることを期待します。



■デザイン会議の使いこなし方

デザイン会議とは

「デザイン会議」は、個人や企業など事業者、市職員や公共施設の指定管理者などの有志がゆるやかに集まります。

参加できるのは市民だけに限りません。肩書や所属を超え多様な感性と得意を持ち寄り共創と挑戦を育みます。

得意なことや抱える悩み、集う人によってさまざま。それぞれの想いや考えを尊重し合いながら、適切に連携することで、課題解決の糸口を見つけアクションへとつないでいきます。

<デザイン会議が取り組むこと>

・ひと・もの・ことのつながりネットワーク化

多様な主体が集まりつながるまちの結節点として、集まる人やものごとの情報をネットワーク化。まちとひとを支える基盤となり、多様な課題や取組を受け止め支えます。

・人材の発掘・支援とマッチング

さまざまな活動が生みだすためには、“旗振り役となる人”の存在が重要。プレイヤーから一歩踏み出し、コーディネーターの役割を担うことができる人を発掘・支援します。さらに、活動の機会や場を提供する人と、適切につなぐことで新たな関係性の構築に寄与します。

・許認可手続きや地域説明など円滑な調整

活動実施にあたり、許認可等の行政手続きや周辺地域への説明など、多様な主体とのさまざまな調整や協議を円滑に行うことができます。

・スタートアップを支援する体制

デザイン会議では、挑戦する人を支えるため、抱える悩みや課題をも共有し、専門家や先輩たちから助言をもらい、活動する人と伴走しながらプロジェクトをすすめていきます。また、初動期を支えるための資金援助を行うことで公益性が高く魅力ある挑戦を力強く支援します。

デザイン会議の使いこなしイメージ

「デザイン会議」では、未来ビジョンに掲げる将来像やコンセプトに合致した実効性の高いプロジェクトが、プラットフォームの承認・支援を得ながら、数多く輩出されることをめざし、多様な主体による共創によって挑戦を促します。

また、プラットフォームの支援を受けたプロジェクトは、新たに立ちあげようとするプロジェクトを支援することで、さらなる共創を育み、新たな挑戦を生み出す好循環を創出します。



COLUMN

公共空間の豊かさが わたしたちの幸せにつながる

道路や公園、広場など、屋外の公共空間を活用した、ひと中心のウォーカブルなまちづくりが、日本のみならず、欧米を中心に世界各地で展開されています。

たとえば、沿道のお店が歩道空間にカフェテラスを設けていたり、日常的に公園の中でマーケットが開催されていたり、車の通行を規制して、道路を広場として使ってみたりと、地域ごとにやり方はさまざま。

これまで公共空間と言えば、規制のイメージが強く、誰もが自由に使える場所ではありませんでしたが、日本では、都市再生特別措置法が制定されて以降、公共空間はまちづくりの貴重な資源として見直され、行政と民間が一緒になって使いこなすという考え方へと、大きく舵が切られてきました。

また、デジタル庁が活用を推奨する「地域幸福度（Well-Being）指標」でも公共空間は重要な要素とされており、そのあり方は、わたしたちの幸福度（Well-Being）に大きな影響を与える要因と考えられています。

公共空間は誰かのものではなく、みんなのもの。ルールやマナーは必要ですが、だれもが自由に訪れ、自由に使ってよい空間だからこそ、ひとりひとりが主体的になれる魅力があります。そんな主体的な関わりが、屋内にはない、偶然の出会いや、新しいつながりを育む原動力になるのかも知れません。

あらためて公共空間を、誰もが社会とつながれる、ゆるやかな関わりしろと捉え直し、その豊かさを高める活動は、コミュニティの希薄化がすすむ現代において、「人への寛容」、「都市への信頼・安心」の土台となる「社会関係資本（Social capital：ソーシャルキャピタル）」を高める社会的な活動と考え、社会で応援していく必要があります。

わたしたちは、このような考えを多くの方と共有し、公共空間の豊かさを高めていくため、国がすすめるウォーカブルなまちづくりに取り組むことで、だれもが幸せに暮らせる社会を実現していきたいと考えています。





草津駅周辺エリア未来ビジョン

2025年（令和7年）3月発行

編集・発行 草津市
お問合せ先 草津市都市計画部都市地域戦略課
滋賀県草津市草津三丁目13番30号
TEL：077-561-6931
FAX：077-561-2486
Email:toshichiiki@city.kusatsu.lg.jp

